

三論小考

著者	佐田 弘道
雑誌名	漢文學會々報
巻	10
ページ	14-29
発行年	1939-12-01
URL	http://doi.org/10.15068/00147308

三論小考

佐田弘道

古來論語の三論即ち魯論語・齊論語・古論語に就いては種々の方面より、諸々の論議が行はれて來たのであるが、今は主として三論の源流を訊ねたい。

三論の源流といつても之には定論があるわけではないが、大勢によれば三論の分立は既に漢初より存したかのやうになつてゐる。然し私はさうは考へず、結論から言へば前漢武帝の代、魯の共王が孔氏宅を壊ちて得た孔壁古文論語以來三論の分立が行はれた、即ち換言すれば三論は凡てこれ孔壁古文論語を隸寫する時に分派した三つの異本であると想定する。従て私の考へる所に依ると孔壁古文論語發掘以前（漢武帝）には名を「論語」と稱する一書は絶えて世に行はれてゐなかつたと思考する。

論述の決着に就いては先づ右位に止めておき、前に戻つて三論の源流を探索することにする。

三論の源流を探索する手順としては先づ三論の受授の状態に就いて明にせねばならぬ。

初に齊論魯論の受授に就いては漢書藝文志に

漢興有齊魯之說。傳齊論者、昌邑中尉王吉・少府宋畸・御史大夫貢禹・尚書令五鹿充宗・膠東庸生、唯王陽名家。

とあり、

傳魯論者、常山都尉龔奮・長信少府夏侯勝・丞相韋賢・魯扶卿・前將軍蕭望之・安昌侯張禹、皆名家、張氏最後而行於世。

とある。又魏の何晏の集解敍には漢の劉向の語として、

齊論語……琅邪王卿・及膠東庸生・昌邑中尉王吉・皆以教授。

とあり、

魯論語……太子太傅夏侯勝・前將軍蕭望之・丞相韋賢及子玄成等傳之。

とある。即ち右の漢志と集解敍に見えた齊魯二論の學者は、齊論には王卿・庸生・王吉・宋畸・五鹿充宗・貢禹の六人があり、魯論には龔奮・魯扶卿・韋賢・韋玄成・夏侯勝・蕭望之・張禹の七人がある。

これまでは略々齊魯二論は互に師法を重んぜられて相對立して傳授されて來たものと思はれるが魯論學者の安昌侯張禹に至つて此等齊魯二論はここに折衷されたのである。即ち張禹の學統に就いては集解敍に「安昌侯張禹、本受魯論。」と明記し、唐の陸德明の經典釋文序錄には「禹本受魯論於夏侯建。」とあり、張禹が元來魯論學者であることは明白であるが、更に漢書張禹傳を見ると、

禹先事王陽。後從庸生。探獲所安。最後出。而尊貴。諸儒爲之語曰。欲爲論念張文。由是學者多從張氏。餘家浸廢。

とあつて、張禹は先づ齊論學者の王陽や庸生に學んで齊魯を兼採してゐることが判り、又集解敍には

安昌侯張禹、本受魯論、兼講齊說、善者從之。號曰張侯論、爲世所貴。

とあり、釋文には

又從庸生王吉受齊論、撰善而從。號曰張侯論、最後而行於漢也。

と述べ、隋書經籍志には

張氏晚講齊說後遂合而考之。

と述べ、又梁の皇侃の義疏には

禹於二論之中。擇善者抄集。別爲一論也。

と述べて殆ど凡て集解や張禹傳の説を踏襲してゐる。かく魯論學者の張禹が齊魯二論を折衷して張侯論なるものを作つたのであるから、隋志に「除去齊魯問王知道二篇、從魯論二十篇、爲定。」といつて、單に齊魯の問王知道篇を除いたゞけで他は魯論のまゝの張侯論であるかのやうに記してあるが、然しそれは張侯論の真相は最早純粹なる魯論といふわけには行かない。然も此の張侯論なるものは前出の張禹傳や集解叙にも見える通り、一世を風靡し他の諸家を壓倒して尊重されたのであるから、純乎たる魯論齊論はここに於て其の影をひそめ、其の跡を絶つて了つたものと思はれる。更に集解叙によれば此の張侯論に従つて包咸や周氏が章句を作つてをり、更に降つて後述の後漢の鄭玄が之を古論と折衷するといふ經過になるのである。此の盛行を見た張侯論も既に現存せず、洛陽に存する後漢の熹平石經の拓本や、殘缺の碑石に依つて見ゆる論語の一部が或は張侯論と關係があるのではないかと言はれてをるが、要するに齊論魯論の二論に就いては、一般に「張侯魯論」といふ名を聞くものの、張禹に至つて齊魯夫々の純粹性を喪失したものである。

次に古論語の受授に就いては集解叙に

安昌侯張禹、本受魯論、兼齊說、善從之。號曰張侯論、爲世所貴。包氏周氏章句出焉。古論、惟博士孔安國爲之訓解。而世不傳。至順帝時、南郡太守馬融、亦爲之訓說。漢末大司農鄭玄々々

とあつて、古論を傳へた者は孔安國であり、次が馬融であるべき所であるが、これには從來異説がある。即ち右の集解叙を通じて見ると、張侯論から古論及鄭注論語の説明に及んでゐるその記述の順序が明瞭でない所に問題が生じたのである。その異説といふのは「古論、惟……世不傳」で一旦文を切つて、之を「安昌侯云々」の前に出すべきであつて、馬融は張侯論の訓說を作つたのである、といふ説である。一體皇侃の義疏叙には

至漢順帝時、有南郡太守扶風馬融字季長、建安中大司農北海鄭玄字康成、又就魯論篇章、考齊驗古、爲之注解。とあり、同じく義疏の集解叙には

漢有馬氏。亦注張禹魯論也。

とあつて、馬融は鄭玄と同じく齊古を參酌して張侯論の注解を作つたことになつてをる。又同様に隋志には

張氏晚講齊說、後遂合而考之。……周氏包氏爲之章句、馬融又爲之訓。

とあつて、明に馬融は張侯論の訓說を作つたものとなつてゐる。故に右の二大文獻の説を受けて、後世に至るも馬融の訓說は古論にあらすして魯論乃至張侯論に就いたものである、といふ説が行はれて來たらしく、我が國に於ても紀傳博士の江家では、これは集解敍が爛脱してゐるのであるとして今の説をとり、爛脱せずとして馬融古論注解説をとつてゐる所の明經博士の清家と對立してゐる。

然るに陸氏の經典釋文敍では

古論語者……孔安國爲傳、後漢馬融亦注之。

といつて馬融は古論に注したのである、とあり、集解の邢昺疏では

自此安國之後至後漢順帝時、有南郡太守馬融、亦爲古文論語訓說。

といつて、馬融は古論の訓說を作つた事になつてゐる。然らば右の馬融の訓說する所のものは張侯論であるといふ説と古論であるといふ説の是非はいかゞであらうか。

それは大略次の諸點によつて、馬融が古論の訓說を作つたといふ陸德明や邢昺の説の正しい事が判る。

(1) 何晏は「孔安國爲之訓解、而世不傳」とはいつてゐるが、集解中に孔安國の注が多々記載されてゐるのを見ると、此の「不傳」といふのは學官に立てて講授しないといふだけのことであつて、訓解が傳はらないといふことではなく、訓解は傳流されてゐて馬融が之を受けることが出來たと思はれること。

(2) 馬融の經學は全般的に古文學であること。

(3) 論語述而篇、子曰若聖與仁章の「正唯」の項に釋文(音義)には「魯讀正爲誠、今從古」とあるに拘らず、馬融注に

は「正如所言」とあつて魯讀を用ひず、古論に同じであること。

(4) 子罕篇、子曰出則事公卿章の「不爲酒困」の項については燉煌本鄭注殘卷には「魯讀困爲魁、今從古」とあるに拘らず馬融注には「困亂也」とあつて魯讀を用ひず古論に同じであること。

(5) 陽貨篇、子曰古者民有三疾章の「廉」の項に釋文には「魯讀廉爲賤、今從古」とあるに拘らず、馬融注には「有廉隅」とあつて魯讀を用ひず古論に同じであること。

(6) 陽貨篇、子貢曰君子亦有惡乎章の「而窒」の項に釋文には「魯讀窒爲室、今從古」とあるに拘らず、馬融注には「窒窒塞也」とあつて、魯讀を用ひず古論に同じであること。

(7) 堯曰篇末の孔子曰不知命無以爲君子也章の項に釋文には「魯論無此章、今從古」とあるに拘らず、此の章に馬融注が存在してゐて、古論に同じであること。

以上の諸條に據り、馬融が古論を受けて、これの訓說を作つたことは疑ひないのである。即ち義疏や隋志の馬融が張侯論を受けたといふ説は誤りであつて、釋文や邢疏の古論を受けたといふ説が正しい事は明白である。

かくて孔壁古論の受授は、孔安國を経て馬融に至つたのである。

次に是に後漢の鄭玄が出て齊魯二論の折衷である所の張侯論と古論とを折衷したのであるが、此の古論は、馬融との年代の關係上當然馬融から受けたものと考へられる。

鄭玄の注解に關しては集解叙に

漢末、大司農鄭玄就魯論篇章、考齊古、以爲注。

とあり、皇侃の集解叙疏には

鄭康成又就魯論篇章、及考校齊古二論、亦注於張論也。

とあつて、その本となつた魯論は張侯論を指すといひ、釋文には、

鄭玄就魯論、張包周之篇章、考之齊古、爲之注。

とあり、(包氏周氏の章句は張侯論を本とす)又隋志にも同じく張侯論を本として齊古二論を參考して注を作つたとある。鄭玄以前の所謂魯論では張侯論のみが壓倒的に盛行されたであらうといふことは、前言した通りであるから、鄭玄が本と爲した魯論といふものは大體張侯論であつたと思はれる。果してさうならば鄭玄の受けて本となした魯論と稱するものは、眞の魯論ではない。それは張侯論、乃ち一旦張禹の手を経た齊魯折衷の論語である。従つて鄭玄は齊魯折衷の張侯論を更に重ねて齊古を以て折衷した事になる。そして釋文にも「鄭以齊古正讀凡五十事」といつてゐて、右の説に撞着する所はないのであるが、其の中釋文には正讀の實例として二十三事しか見えず、燉煌本鄭注論語殘卷に發見された陸氏失載の三事を合すると二十六事である。然し此等の正讀事項は凡て「今從古」とのみ述べて齊論に從つたものが一ヶ條も無いのは疑はしいことである。

かく觀じ來ると、島田鈞一先生が

案するに何晏集解に始て鄭玄の齊古考正を記してより經典釋文及隋書經籍志は之を承けて鄭玄が齊古考正の事を記すれども實際は古論を以て考校したるに止り、齊論は關係ない。集解叙の齊古に考ふといふは何晏の失攷で、大に後人を誤つたと言はねばならぬ。(支那學研究 第四編)

と言はれたのは從ふべきであると思ふ。

右の次第にて、鄭玄が正讀の參考に供したものは古論のみであつて、齊論は最早既に張禹の手に掛つて張侯論中に折衷されて了ひ、鄭玄の注解には全然關係がないと考へられる。

然らば鄭玄の受けた古論は如何なるものであつたらうか。燉煌本鄭注論語殘卷の泰伯、子罕、鄉黨の各篇題の下に、「孔氏本鄭氏注」とあるのを考へると、鄭玄が參考した古論は孔氏古文論語であることは明白である。

尚「泰伯第八」「子罕第九」「鄉黨第十」とあるのを考へると、之を皇侃義疏に「古論篇次、以鄉黨爲第二篇、雍也爲第三」とある。

るに照して鄭註本は集解叙に「鄭玄就魯論篇章、考齊古、以爲註」と述べてある通り、魯論の篇章に就いて考校されてゐることも分明になる。

かくて鄭玄は張侯論と孔氏古論とを折衷し、是に齊魯古の三論の區別は殆ど喪失されるに至つたのである。辛うじて前出の釋文と熾煌本鄭注殘卷に見られる合計二十六ヶ條の正讀事項に依つてのみ孔氏古文論語の片鱗をうかゞひ得るに過ぎない。然して此の鄭注論語すら今では其の全貌を知るよしなく、現在では單に玉函山房輯佚書があつてそれと思しき斷片を見得るのみである。ともかく此の鄭注論語に至つて三論は悉く折衷されて了ひ、三論の對立はなくなつて了つたのである。

以上三論の受授折衷の概況を述べたのは、以下三論の源流を考察するための手順である。換言すれば三論の別が既に喪失されてゐる今日に於て三論の源流を訊ねるには一體何を手掛りとして出發すべきであるか、といふその出發點を付けるための豫備工作である。然らばその出發點、手掛りとは何か、即ちそれは張侯論と孔氏古論とを折衷した所の鄭注論語である。然るにかく貴重なる鄭注論語は現存せず、その全貌を知ることが全然不可能事である。唯先づ熾煌出土の鄭注論語殘卷と釋文中に引かれた鄭讀によつて、その斷片を知るより外の術はない。此等の文獻より鄭注論語の内容を推定し、而してその鄭注論語より、その中に折衷されてゐる所の張侯論と孔氏古論の檢討を進むれば、三論の源流の探索に當つて何等かの得る所があると思ふ。

先づ陸氏の經典釋文に就いて見ると音義の中に

鄭以齊古正讀凡五十事。

とある。但し、ここに「以齊」とあるは何晏の失攷による誤りであつて、實際は張侯論をば古論のみを以て正讀したものであることは前言した通りである。又鄭玄が參考に供した古論は孔氏注の古論であつたことも前言の通りである。然し

事實上に於ては、釋文所載の正讀二十三ヶ條、燉煌本殘卷所見の正讀三ヶ條、計二十六ヶ條のみしか知ることが出來ない。即ち左の如くである。

- (1) 學而篇、傳不習、魯讀傳爲專、今從古、
- (2) 公治長篇、可使治其賦也、梁武云、魯讀作傳、鄭云、軍賦、是鄭從古改魯也。
- (3) 又、崔子、魯讀崔爲高、今從古、
- (4) 述而篇、吾未嘗無誨焉、魯讀誨爲悔、今從古、
- (5) 又、五十以學易、魯讀易爲亦、今從古、
- (6) 又、正唯弟子、魯讀正爲成、今從古、
- (7) 又、君子坦蕩々、魯讀坦蕩爲坦湯、今從古、
- (8) 子罕篇、冕衣裳者、鄭本作弁云、魯讀弁爲綫、今從古、(鄉黨篇同)
- (9) 又、沽之哉沽之哉、魯沽之哉不重、今從古也、
- (10) 又、不爲酒困、魯讀困爲魁、今從古、
- (11) 鄉黨篇、下如授、魯讀下爲趨、今從古、
- (12) 又、瓜祭、魯讀瓜爲必、今從古、
- (13) 又、鄉人饑、魯讀爲獻、今從古、
- (14) 又、君賜生必審之、魯讀生爲牲、今從古、
- (15) 又、車中不內顧、魯讀車中內顧、今從古、
- (16) 先進篇、仍舊貫、魯讀仍爲仁、今從古、
- (17) 又、詠而歸、鄭本作饋、饋酒食也、魯讀饋爲歸、今從古、

(18) 顏淵篇、片言可以折獄者、魯讀折爲制、今從古、

(19) 衛靈公篇、好行小慧、魯讀慧爲惠、今從古、

(20) 季氏篇、言未及之而言謂之躁、魯讀躁爲傲、今從古、

(21) 陽貨篇、歸孔子豚、鄭本作饋、魯讀饋爲歸、今從古、

(22) 又、古之矜也廉、魯讀廉爲貶、今從古、

(23) 又、天何言哉、魯讀天爲夫、今從古、

(24) 又、惡果敢而窒者、魯讀窒爲室、今從古、

(25) 微子篇、已而已而今之從政者殆而、魯讀期斯已矣今之從政者殆、今從古、

(26) 堯日篇、孔子曰不知命無以爲君子也、魯論無此章、今從古、

以上の二十六ヶ條であつて、(8)は釋文にも熈熈本殘卷中にも兩存し、(9)(10)は熈熈本殘卷中にもみ見えてゐる。又(8)は郷黨篇にも同じ事がいへるので或は全部で二十七ヶ條とも考へられる。とにかく右の諸條に據り、吾人は張侯論と孔氏古論の一部を視ふことが出来るわけである。然らば此等張侯論、孔氏古論の二論は、當然同じく論語の一書に本づき乍ら、如何にしてかゝる相異を招來したのであるか、その相異の由來を檢討することこそ、張侯論と孔氏古論、延いては三論の源流の探索でなくてはならない。

さて、論述上今一つ吟味を要する事柄は孔氏古文論語の眞僞に關する問題である。孔安國は前漢古文學の大師で、その著には尙書、孝經、論語の注傳があると稱せられてゐる。然し其の中尙書、孝經の傳が後人の假託であることは現今では定論となつてゐるやうである。そして又、此の論語の傳注に關して初て疑を提出したのは清の劉臺拱の論語駢枝の「攝齊升堂」(郷黨篇)の條に於てであり、次には同じく陳鱣の論語古訓であり、其の後沈濤の論語孔注辨僞、丁晏の論語孔注證僞が出て、益々その疑を深くした。就中沈濤は論語孔注辨僞の自序に於て、

於古文論語、但云、論語古二十一篇、出孔子壁中兩子張而已、並不云有孔氏說若干篇、是孔安國未嘗作傳、其證一也。何氏集解序云、古論惟博士孔安國爲之訓解、而世不傳、既云世不傳矣、平叔所集、又從何得、其證二也。司馬遷親從安國問、故宜不背其師說、今考之孔子世家弟子列傳、皆與孔注不合、其證三也、鄭康成就魯論篇章、考齊古爲之注、以齊古讀正凡五十事、今釋文所引鄭讀之從古者、孔注率同魯論、安國既注古論字、豈轉不從古、其證四也。許叔重解字序云、僞論語古文、今說文所引論語之字、每與孔注不同、其證五也。

と五ヶ條を掲げて、その僞書たることを述べ、その僞作者は何晏であると迄言つてゐる。又同様に丁晏はその僞作者を王肅なりと言つてゐる。かく僞作者を何晏とか王肅とかに論定することは穩當を缺き極めて臆説に過ぎぬと考へられるし、又清の愈懋の如く未だ孔注の眞僞の程は定め難いと論斷を控へる者もあるが、大勢は何といつても孔氏注を僞作なりとする説に有利であると思ふ。

果して此の論語の孔注僞作説が正しいとすれば、必然的に孔氏古文論語と孔壁古文論語とを全然別個のものであることは自明の理である。即ち孔氏古論は僞古文であり、孔壁古論は眞古文であつて、互に別の物でなければならぬ。然し乍ら、かく孔氏古論は眞古文でなくて僞古文であり、僞作のものと呼ばせられることになるが、よく考察すると、此の孔氏古論と張侯論とはかなり縁の近いものではなからうか、と考へる。と言ふのは、前言の鄭玄の正讀二十六ヶ條の中に存する、張侯論と孔氏古論との文字の相異を観ると、その間に左程甚しい分離がないのであつて、此の二論の分岐點が、換言すれば此の二論の原典なるものが、年代的に案外近い所に存在したと想像されることである。

例へば如上の正讀二十六ヶ條の中でも、張侯論と孔氏古論とが互に字形の類似から讀方を異にしたと思はれる點や、字音の類似から互に假借の字を用ひて文字を異にしたと思はれる點が、かなり多く見える。實例をとつて見れば、張侯論が「仁舊貫」(16)と讀み、孔氏古論が「仍舊貫と讀んだのも、又張侯論が「夫何言哉」(23)と讀み、孔氏古論が「天何言哉」と讀んだのも、同一原典の寫定の際に發した字形の類似による相異であり、張侯論が「車中内顧」(15)といひ、孔

氏古論が「車中不内顧」といつて内容を全然反對にして訓詁上の問題を起したのに至つては、その原因は單なる寫定の際の脱字による誤りと考へざるを得ない。又張侯論が「可使治其傳也」(2)といひ、孔氏古論が「可使治其賦也」と讀んだのや、張侯論が「五十以學亦」(5)といひ、孔氏古論が「五十以學易」と讀んだのや、張侯論が「君子坦湯湯」(7)と讀み、孔氏古論が「君子坦蕩蕩」と讀んだのや、張侯論が「君賜牲必畜之」(14)と讀み、孔氏古論が「君賜生必畜之」と讀んだのは、結果として意味上の相異を來しても、其の本に遡れば單に原典寫定の際に生じた字音の類似による假借の字を用ひたゞめの相異に過ぎない。かく觀察する時、此等張侯論と僞作たる孔氏古論とは、その共通の原典を挾んでかなり密接な關係を有してゐたやうに考へられる。然らばその兩論の共通原典こそ、齊魯古論の分立を出したる本體でなくてはならない。

張侯論と僞作である所の孔氏古論との共通原典を探究する第一歩として、有史上最古の三論學者、即ち漢書藝文志と集解叙に見えたる三論の學者の年代を検討する必要がある。

先づ古論の學者に就いては、

孔安國(集解)は史記世家によれば武帝の代であり、馬融(集解)は後漢順帝の代である。次に齊論の學者に就いては、

王卿(集解)は邢昺の疏に「天漢元年、由濟南太宋爲御史大夫」とあり、天漢とは武帝代の年號で王卿は武帝代の人である。

庸生(漢志・集解)は漢書張禹傳に「禹先事王陽、後事庸生」とあり張禹はその傳によつて元帝成帝の代の人なる故、庸生は宣帝か元帝の代の人であらう。漢書儒林傳(孔安國)によれば古文尙書が孔安國からその弟子都尉朝を経て、この庸生に授けられてゐる。

孔氏有古文尙書、孔安國以今文讀之、因以起其家、……安國爲諫大夫、授都尉朝、……都尉朝授膠東庸生(儒林傳)

王吉(漢志・集解)は漢書王吉傳によれば宣帝元帝の代の人である。
宋畸(漢志)は漢書蕭望之傳に見ゆる所に據れば宣帝代の人であり、顏師古の注に據れば宣帝紀の危事畸とあるは即ちこの宋畸のことである。

五鹿充宗(漢志)は漢書儒林傳(梁丘賀)に見ゆる所に據れば充宗は梁丘賀より易を受けてをり、この梁丘賀は宣帝代の人であるから、充宗は當然宣帝以後の人である。

貢禹(漢志)は漢書貢禹傳に「元帝初即位、徵禹爲諫大夫」とあるに據れば元帝代の人である。

次に魯論の學者の年代に就いては、
龔奮(漢志)は年代不明である。

魯扶卿(漢志・集解)は傳記不詳なれど、王充論衡正說篇に「初孔子孫孔安國、以教魯人扶卿、官至荊州刺史、始曰論語、」とある「魯人扶卿」がその人であると見做せば武帝代の人である。

韋賢(漢志・集解)は漢書韋賢傳に據れば徵せられて明帝に詩を授け、又地節三年(宣帝代の年號)に骸骨を乞ふてゐるから、昭帝宣帝の代の人である。

韋玄成(集解)は前の韋賢の四男であり、元帝の代の人である。夏侯勝(漢志・集解)は漢書夏侯勝傳に據れば、宣帝の時徵せられて、太后に尙書を授けたとあるから宣帝の代の人である。

蕭望之(漢志・集解)は漢書蕭望之傳に據れば夏侯勝に従つて論語禮服を問うたとあり、元帝代に弘恭、石顯等の害する所となつて自殺してゐるから宣帝元帝の代の人である。

張禹(漢志・集解)は漢書張禹傳に據れば元帝、成帝、哀帝の代の人である。(哀帝建平二年に薨す)

右の古論學者二人、齊論學者六人、魯論學者七人を通觀すると龔奮のみが年代が全然不明で、孔安國、王卿、少々疑

はしいが魯扶卿の三人が武帝代の人であり、他は悉く昭帝以後の人である。即ち凡て孔壁真古文論語の發掘以後の人々ばかりである。殊に魯論學者の魯扶卿が孔安國から論語を受けた疑があつたり、（論衡正說篇）齊論學者の庸生がやはり孔安國から都尉朝を経て古文尙書を受けてゐたり（儒林傳孔安國、）してゐるのを考へると、此等三論の學者の分立は孔壁真古文論語の發掘に由來してゐるのではないかとの疑問が起きる。

此の疑問は、前述の齊魯折衷の張侯論と僞作である孔氏古論との關係が極めて密接な事實に徴して見ると、此等三論の分立は尙更其の源を孔壁真古論に發してゐるのではないかと想像せられるのであるが、此の想像を肯定するものとして武内義雄博士の説を擧げる事が出来る。其の要旨を次に述べると、

曾子曰、吾曰三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎、（學而篇）（釋文云鄭曰魯讀傳爲專今從古）

最後の句、古論は「傳」の字に作り、魯論は「專」の字になつてゐるといふが、いづれにしても意味が曖昧である。もしその前の三句の句法から推せば末句「不習乎」の上に「而」の字が脱落してゐるらしく、又大載禮の

君子既學之、患其不博也、既博之、患其不習也。（曾子立事）

や說苑の

君子博學、患其不習云々（說叢）

と考へ合すと「傳不習乎」は「博而不習乎」の間違でありはせぬかと思はれる。一體「傳」の字と「搏」の字とは形が似て誤られ易い。

そこで博士は「博」の字が「傳」や「搏」に誤られる例をあげ「搏」は「專」の或體であることを述べて、孔氏古論は「博」から「傳」へと誤り、張侯論は「博」から「搏」を経て「專」へ誤り、兩論共に「而」の字を脱落したものであると云つてをられる。そして僞作である孔氏古論は孔壁真古論の隸古定本で、孔氏古論は張侯論の盛行後になつてから、孔壁真古論を別人が隸寫したものであるといはれ、従つて僞作の孔氏古論の經文が說文所引の古論と同じからず、

その注解は司馬遷の史記とも撞着するのであると、述べてをられる。

私はこの武内博士の論説は、前に自分の考察した立場に於ても正に真相を語るものではなからうかと思ふ。將又、王充論衡の正説篇を見ると、

至武帝、發取孔壁中古文、得二十一篇、……昭帝女讀二十一篇、宣帝下太常博士時、尙稱書難曉、名之曰傳、後更隸寫以傳誦、

とあり、此の間の消息がうかゞひ得ると思ふ。

因つて張侯論と孔氏古論との差異は單なる、孔壁真古文論語を隸寫する際に生じた相異點でなくてはならぬ。そしてこの張侯論は前言の通り齊魯二論の折衷であるから、齊魯二論各々についても同様真古文隸寫による分立といふことが出來よう。即ち三論の分立は孔壁真古文論語を隸寫する場合に生じた別である。換言すれば孔壁真古文論語は三論の未だ分立せざる前の原典である。

私の結論は右で終つた次第であるが、これには未だ障害となるために解決すべき問題が數ヶ條存する。

(1) 何晏の集解叙には劉向の言として、先づ魯論齊論の所傳の事が説明され、次いで「魯共王時……得古文論語」と古論に説き及んでゐる、又漢書藝文志には「漢興有齊魯之說、傳齊論者……傳魯論者……」とあつて別に古論の傳者には及んでゐない。此等の事から從來、齊魯兩論はさも孔壁古論發掘以前既に行はれてゐたやうに考へられて、これが遂に通説となつてゐるやうである、然し集解叙や漢志に列せられてゐる齊魯古三論の學者傳者が全部武帝以後の人々であつて武帝以前の人々が皆無であることは前述の通りであり、この通説は疑ふ餘地を多分に有してゐる。従つて齊魯兩論のみが古文發掘以前即ち武帝以前に行はれてゐた事の論據にはなり得ない。

(2) 後漢の趙岐の孟子題辭に

孝文皇帝、欲廣遊學之路、論語孝經孟子爾雅、皆置博士、

とある。この説によれば前漢文帝の代に既に論語が行はれ、而も今文博士まで置かれてゐたことになる。然し趙岐の此の説は何に據つてなされたのであらうか。丁度同じ事と思はれる事を劉歆の讓太常博士書の中に

至孝文皇帝……天下衆書多出、皆諸子傳説、猶廣立於學官爲置博士、

とある。然し此の文には「論語」の字が見えない。一體武帝以前には論語中に見ゆるものと同じやうな孔門の語録が澤山流傳されてゐた。その事は孟子荀子を見ても判るし、武帝以前の文獻である新書・新語・韓詩・外傳等、その他の經典中を見ても明瞭に判る所である。此等の語録中には論語の中に存するものと一致又は類似するものも多少はあるが、大方は然らざるものである。そして此等の語録は「孔子曰」とか「子曰」とかを附して引かれてゐるか、又は「傳曰」と稱せられて廣く引用されてゐる。然るにこの「傳」といふ稱呼は、其の後論語の書が出現してからも依然として、その稱呼ともなり、漢書恭王傳に「王壞孔氏舊宅以廣其宮、於其壁中、得古文經傳、」とあり、論衡正說篇には「漢武帝發取孔壁古文至宣帝下太常博士時、尙稱難曉、名之曰傳、」とあり、漢書揚雄傳贊には「傳莫大於論語」とあり、後漢書光武十五傳には「沛獻王輔善説孝經論語傳、」とあつて、いづれも論語を傳と稱する習慣があつた。故に趙岐は劉歆の謂ふ「諸子傳説」の中に、既に論語の書が存したと考へ誤つたものと思はれる。劉歆の所謂「諸子傳説」とは孔門に關する限り、孟荀をはじめ武帝以前の文獻に表はれた孔門語録一般を指すのであつて、論語といふ成書が此の中に含まれてをつたかどうかは疑はしい。漢書に於て論語の讀まれた記事の存するのは私の見る所では昭帝紀始元五年の詔に「朕修古帝王之事、通保傳傳、孝經論語尙書、未云有明」とあるのを嚆矢とする。昭帝以前にはかかる明記がない。従つて獨り趙岐の説を以て文帝の代既に今文博士の設置があつたといふ事は是認するわけには行かぬ。(玉海に「漢孝文帝置論語趙氏に本づいたらしく、同) 様に論據となり得ない。)

(3) 禮記坊記に

子云、君子弛其親之過而敬其美、論語曰三年無改於父之道可謂孝矣、高宗云、三年其惟不言、言乃讜、

とある。この一文を以て論語の書が既に坊記の成立以前にあつたとされ、梁の沈約の坊記子思作説に従へば論語の書も亦子思以前から存した事になる。然し禮記中論語の文と同じものを引くものが數多あるが、一として「論語曰」の字を用ひたるもの無く、僅にこの一文のみである。然もこの「論語曰云々」の一文は前後と意味上の重複があり、後人の注記などの誤入ではないかといふ疑が入れられないわけでもない。とにかくかゝる例外的「論語曰」を以て武帝以前より「論語」としての一成書が行はれてゐたといふ論據となすには尙不充分のやうに考へる。

(4) 韓詩外傳卷五に

論語曰、必也正名乎、

とある。一體この韓詩外傳も孔子の語を引くもの極めて多く、そのうち論語中のものと酷似するものも亦多い。然るに此の文を除いては殆ど「論語曰」を附したものは無い。従つてこれも前項と同様の理由で俄に信するわけに行かぬ。其他、先秦より前漢初期にかけて、即ち武帝以前の文獻、例へば前出の禮記等の經典をはじめ韓詩外傳・新書・新語等に引かれた文で論語中のそれと同じ文や類似の文あるのを目して所謂「逸論語」と稱するのは後人の誤稱である。一體此等の文獻中には論語と同一、若しくは類似の文も存するが、大體論語にない孔門の語録の方が遙に多數で「孔子曰」とか「傳曰」とかで冒頭されてゐる。即ち此等の諸々の語録は流傳中の孔門の語録を引いたのであつて、その中の論語と同一、若しくは類似の一部の語録のみを拉し來つて逸論語と命名するのは理に合はない。

以上の五ヶ條によつて、武帝の時の孔壁古文發掘以前に「論語」としての一成書は未だ世に行はれてをらぬ、といふ事が出來、従つて結論として前言した、三論は孔壁眞古文論語の隸寫後にはじめて三分されたといふ所見に差障りがな
いと考へる。即ち三論の源流は孔壁古論に發したのである。(完)